インタビュー

現場目線・ユーザー目線を徹底し、「使ってもらえる」ソフトウェア開発技術を創出していく

ブロードバンド・ユビキタスサービスを安心・安全・便利、かつ経済的に活用するための基盤的な情報処理技術の研究開発を進めるNTTソフトウェアイノベーションセンタ。同センタにおいて、ソフトウェア開発技術に関する研究開発を担当するのがソフトウェア開発技術プロジェクトである。ソフトウェア開発の安定化・効率化を図る同プロジェクトの取組みについて、星野隆プロジェクトマネージャにうかがった。

NTT ソフトウェアイノベーションセンタ
ソフトウェア開発技術プロジェクト
プロジェクトマネージャ **星野 隆**氏

ソフトウェア工学の枠を超え実践的な開発技術に取り組む

――NTTソフトウェアイノベーションセンタでのソフトウェア開発技術についての取組みをお聞かせください。

星野　当センタでは、高品質で迅速なサービス提供の実現や、保守を含めたTCO削減に向けたソフトウェア開発技術の創出に取り組んでいます。ソフトウェア開発と保守運用プロセス、そしてそれらを支える技術を図1のように分類し、①ソフトウェア開発に直接役立つ技術、②開発マネジメント技術、③人材育成、の3つの軸で活動しています。

①については、日本最大級のユーザー企業とSIerを擁するNTTグループのソフトウェア開発をさらに安定化・効率化することを第一の目標に研究開発を進めています。そのためにグループ各社との連携を深め、ニーズや課題の把握に努めています。同時に、産業界や学術分野での貢献も視野に入れて、幅広い取組みを行っています。

②、③はどちらかと言えば、当社内でのソフトウェア開発の改善を狙った取組みです。例えば②については、NTT研究所で開発するソフトウェアの品質を担保するために開発標準を定めたり、品質の評価手法を確立したりしています。③の人材育成については、若手研究者にソフトウェア開発を全工程一通り経験してもらう研修を5年程前から始めています。これは、開発現場で使われる言葉を理解したり、トラブルが生じがちなポイントを把握できるようにしたりすることを狙ったものです。現在までにそれなりの成果が出ていると認識しています。

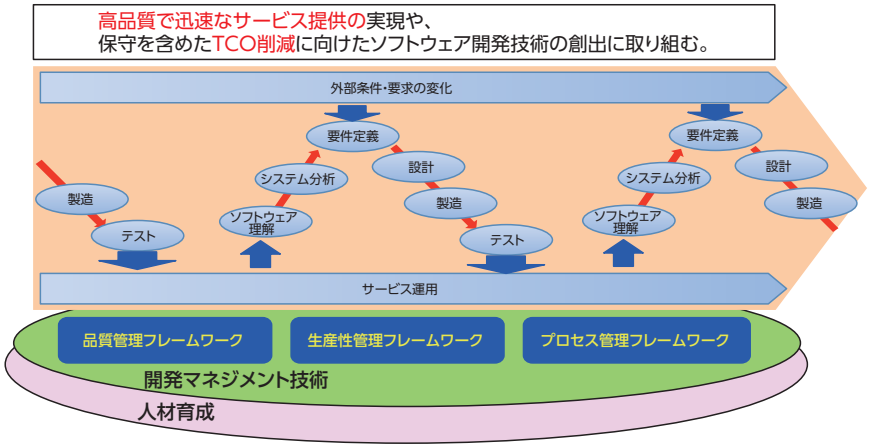

図1　ソフトウェア開発技術プロジェクトの取組み概要

――ソフトウェア工学と呼ばれる領域の研究を主にしていると理解して良いのでしょうか？

星野　ソフトウェア工学という言葉は、体系的な手法の確立のようなシステマティックで定量的なアプローチの取組みを指すのが一般的です。もちろん、そうした活動もしていますが、我々の活動の特徴は、開発現場で役立つ実践的な技術やツールの開発も手掛ける点です。それを表すため、ソフトウェア工学という言葉は使わずに「ソフトウェア開発技術」

という言葉をプロジェクト名に付けています。

企画・要件定義の見直しを含む改善サイクルの実現を目指す

――ソフトウェア開発のあるべき姿とはどのようなものか、お考えをお聞かせください。

星野　従来のソフトウェア開発では、企画・要件定義に始まり、開発・試験を経てリリースに至れば開発が終了するという考え方や開発スタイルが主流でした。しかし、継続的にソフトウェアを改善していくという観点に立つと、これでは不十分です。例えば、リリース後に運用上の問題が判明した場合などには、問題を解消するために、再度、開発作業を実施する必要があります。

そこで最近では、開発と運用が密に連携して、開発サイクルを繰り返しながら製品をブラッシュアップしていく「DevOps」という考え方が広まりつつあります。

我々も、基本的にはこの DevOps の方向性が望ましいと考えています。ただし DevOps に基づく開発においても、開発と運用の連携ということだけに焦点が当たり、トッププランニングを含めた企画・要件定義の見直しにまで踏み込まないケースも多いようです。我々は、運用後のモニタリングから得たフィードバックを元に、業務・システム課題分析や IT 投資戦略、ソフトウェアの要件定義の見直しをきちんと実施することが本来の DevOps だと考えています。この目指すべき世界観を図示したものが図 2 です。このようなサイクルを確立して企画・要件定義を継続的に見直せるようになれば、ビジネスや業務を継続的に改善していくことができると考えています。

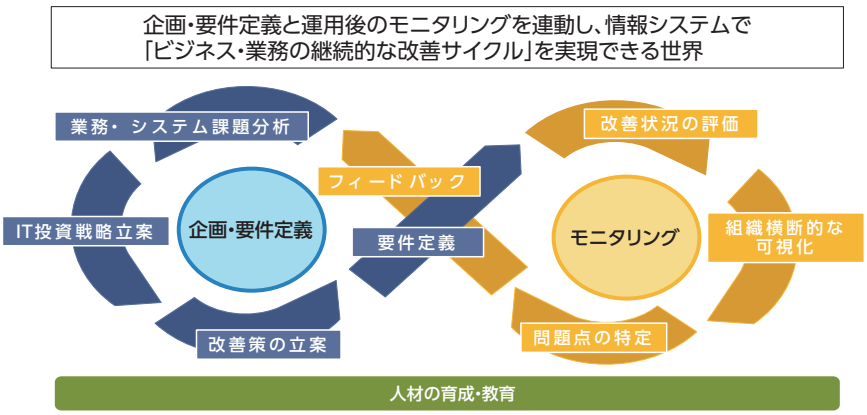

図 2　企画・要件定義の領域が目指すべき世界観

それと同時に、実際にモノづくりの作業を支援する技術を開発することも重要です。生産性を高めるために、設計・製造・テストの各フェーズで使用するさまざまなツールや技術の開発も進めています。

ここで重視しているのは「普通の技術者」が使える技術であるということです。せっかく開発しても使って貰えなければ意味がありません。また、すべてを我々だけで開発できるわけではありませんから、OSS のツールなどを活用して、どう効率化できるか、劇的な変化を引き起こす手段はないかなどについて日々リサーチや議論を重ねています。

全体最適の視点を持ちつつ現場で受け入れられる提案を

――研究開発に当たっているメンバーに期待するのはどのようなことでしょうか？

星野　高い視点で現場を見て欲しいということです。メンバーには常々「ユーザー目線」であることを求めています。実際に現場で何が起きていて、何をすれば現場に役立つのかを把握することがまず重要だからです。ただ、そこばかりにフォーカスすると個別最適に陥る危険がありますので、全体を見極める高い視点を持つ必要があります。

ただし、高い視点で物事に当たると、どうしても「上から」の態度や発言をしがちです。それはマイナスに働いてもプラスになることはありません。その点には十分注意してほしいと考えています。

実際、我々の技術開発が成立するのは、事業会社を始めとするグループ企業にいろいろ協力をしてもらっているからです。現場からのフィードバックを受け、それに基づいた研究開発でお返しをするというループをうまく回すことを心がけています。

――本日は有難うございました。

（聞き手・構成：末安 泰三）